

中國古典詩における「勞歌」について（上）

井 口 博 文

一 はじめに

本稿では、「中世期の勞歌」について、用例の實態を整理し、關連事項を考察する。

ここでいう「中世期」とは、後漢と北宋にはさまれる約七百年間をいう。その期間の全詩歌は、原則として、本稿が底本とする文獻①《先秦漢魏晉南北朝詩》および文獻②《全唐詩》に收録されている。なお、今回は、《全唐詩補編》を對象外とした。唐詩の代表作は、大部分が文獻②《全唐詩》九百卷に收録されているからである。ちなみに、文獻①《先秦漢魏晉南北朝詩》の本文は「全唐詩電子檢索系統」で、文獻②《全唐詩》の本文は「全唐詩全文檢索資料庫」で、機械的

中國古典詩における「勞歌」について（上）（井口）

に檢索できる。後者によれば、文獻②《全唐詩》における「勞歌」は、【付表】に示めたとおり六十一例ある。

【注記】【付表】では、文獻②《全唐詩》における「勞歌」の全用例を機械的に列挙してある。以下の本稿では、各作品の番號を活用している。ふたつの「句數」は、左右の順で、總句數と「勞歌」の使用句の番號である。A～E五分類については、第四章で後述する。備考の内容は、「勞歌」の使用句に直接かわり、かつ欄内におさまりきらない分量の記事に限定し、それ以外の異題・異文については省略してある。備考欄で「○」のついている數字は、その句の文字順をあらわしている。たとえば、「61:⑤一作手」は、61番の作品について、第七句の「勞歌此分首」が、ある本では「勞歌此分手」になっていることをあらわしている。

二 樂府題

《樂府詩集・卷八十六・雜歌謠辭四》には、「勞歌」という題名で三首が收録されている。ただし、文獻①《先秦漢魏晉南北朝詩》「第三三八頁」の「北周」蕭摛《勞歌》は、四句からなる斷片であり、全體像は不明である。ここでは、この二首を掲載する。

- 0 勞歌二首
〔宋〕伍輯之（文獻①「第一三〇頁」）
1 幼童輕歲月
幼童 歲月を輕んじ
2 謂言可長久
謂いて 長久たるべしと言う
3 一朝見零悴
一朝 零悴を見
4 歎息向秋霜
歎息して 秋霜に向う
5 迢遰已窮極
迢遰は 已に窮極し
6 疾病復不康
疾病は 復び康たらず
7 每恐先朝露
毎に恐る 朝露に先んじ
8 不見白日光
白日の光を見ざるを
9 庶及盛年時
庶わくは 盛年の時に及び
10 暫逐情所望
暫らく 情の望む所を逐げん
11 吉辰既乖越
吉辰は既に乖越し

- 12 來期眇未央
來期は眇として未だ央ならず
13 促促歲月盡
促促として 歲月盡き
14 窮年空悲傷
窮年 空しく悲傷す
1 女蘿依附松
女蘿は 松に依附し
2 終已冠高枝
終に已に 高枝に冠す
3 浮萍生託水
浮萍は 生は水に託し
4 至死不枯萎
死に至るも 枯萎せず
5 傷哉抱關士
傷ましき故 抱關の士
6 獨無松與期
獨り 松と期する無し
7 月色似冬草
月色は冬草に似て
8 居身苦且危
居身 苦しき且つ危うし
9 幽生重泉下
幽生 重泉の下
10 窮年水與漸
窮年 水と漸
11 多謝負郭生
多く 郭生に負うを謝するも
12 無所事六奇
六奇を事とする所なし
13 勞爲社下宰
勞して 社下の宰と爲るも
14 時無魏無知
時に 魏無知なし

（大意：わかいころには、おもいもよらなかつたのに、老衰して病弱になってしまった。かなしいことだ。）

(大意：自然はたくましいのに、人生はむなし。)

この作品では、二首ともに「人生短促」という〈古詩十九首〉の主題が共通しており、「勞歌」は「離別」や「勞働」を意味していない。

これらの作品が「勞歌」と命名された背景としては、制作された當時に「勞歌」という楽曲があり、作品が歌唱されていた可能性もかんがえられる。そのばあいには、「勞」という語が楽曲の種類を指示しているだけでも、問題はなくなる。「勞歌」の用例数が、文獻①《先秦漢魏晉南北朝詩》の十倍ちかくある文獻②《全唐詩》には、「勞歌」という樂府題の作品が存在しない。このことから、楽曲としての「勞歌」が、唐代では演奏されなくなっていた、とみなすこともできよう。

三 最初期の用例

「勞歌」が使用されている文獻①《先秦漢魏晉南北朝詩》収録作品のうち、孔德紹〈夜宿荒村〉〔第二七二頁〕は文獻②《全唐詩》の【付表】掲載作品55番と、慧浄〈雜言詩〉〔第二七七三頁〕は同58・59番と、それぞれ同一の作品である。

中國古典詩における「勞歌」について(上)(井口)

るから、詩句における「勞歌」の最初期の用例としては、以下に掲載する二首しか確認できない。

- | | | |
|----|-------|--------------------|
| 0 | 度關山 | 〔梁〕劉遵(文獻①〔第一八〇九頁〕) |
| 1 | 隴樹寒色落 | 隴樹は寒色に落ち |
| 2 | 寒雲朝欲開 | 寒雲は朝に開かんと欲す |
| 3 | 谷深聲易響 | 谷は深くして聲は響き易く |
| 4 | 路狹轡難回 | 路は狭くして轡は回り難し |
| 5 | 當知結綬去 | 當に知る綬を結びて去るは |
| 6 | 非是棄繻來 | 是れ繻を棄てて來たるには非ざるを |
| 7 | 行人思顧返 | 行人は思ひて顧返し |
| 8 | 道別且徘徊 | 道に別れて且らく徘徊す |
| 9 | 願度關山鶴 | 願わくは關山を渡る鶴 |
| 10 | 勞歌立可哀 | 勞歌立ちて哀しむ可し |
- (大意：たびびとにとって、關山は非常にけわしい。)

- | | | |
|---|--------------------------|-----------|
| 0 | 答楊世子詩〔隋〕孫萬壽(文獻①〔第二六四〇頁〕) | |
| 1 | 太華五千仞 | 太華は五千仞 |
| 2 | 長河九萬里 | 長河は九萬里 |
| 3 | 山川每蘊玉 | 山川は毎に玉を蘊み |

中國詩文論叢
第十九集

- 4 人物多君子 人物は多く君子たり
5 丞相朝所宗 丞相は宗とする所に朝し
6 太尉國之紀 太尉は國の紀たり
7 若人惟傑出 若のごときの人 惟れ傑出し
8 濟世承余祉 世を濟いて 余祉を承く
9 趨庭遵教義 庭に趨りては 教義を遵し
10 博物兼文史 物を博くしては 文史を兼ね
11 奇聲振宛洛 奇聲宛洛に振るい
12 雅論窮名理 雅論名理を窮む
13 伊余苦疲病 伊れ余 疲病に苦しむ
14 寂寞罕賓遊 寂寞として 賓遊を罕にす
15 不言驅駟馬 駟馬を驅るを言わず
16 於焉訪一丘 焉に於いて 一丘を訪ぬ
17 縞紵始云贈 縞紵始めて云に贈り
18 膠漆乃相投 膠漆乃ち相い投ず
19 伏枕空長想 枕に伏して 空しく長想するも
20 驂蹇逐無由 驂は蹇にして 逐に由なし
21 忽此承來翰 忽として 此に來翰を承く
22 華藻殊輝煥 華藻は殊に輝煥たり
23 雖則濫吹噓 則ち 吹噓を濫りにすると雖も

- 24 可以蠲憂歎 以て 憂歎を蠲く可し
25 懷袖終不滅 懷袖 終に滅せず
26 掌握方留翫 掌握 方に翫を留む
27 和風初應律 和風は初めて律に應じ
28 山鶯已復新 山鶯は已に復た新たなり
29 芳菲徒自悲 芳菲 徒らに自ら悲しみ
30 節物不關人 節物 人に關わらず
31 勞歌雖有曲 勞歌 曲ありと雖も
32 無以報陽春 以て 陽春を報ずる無し
- (大意：中國は、ゆたかな自然と人材にめぐまれている。わたしは病氣にかかり、意氣消沈していたところ、友人から來信があった。)

兩作品ともに、「勞歌」が終結部分で使用されている點については、第五章で後述する。

四 意味の類別

「勞歌」が意味する内容は、一様でない。ここでは、文獻②《全唐詩》の用例を對象として、代表的な意味ごとに分類

してみる。【付表】をみてもわかるとおり、「勞歌」を複数回もちいている作者は複数名いる。そのなかから、「離別」「勞働」については、代表的な二義をつかいわけていた〔盛唐〕孟浩然〔六八九〜七四〇〕の作品を例示してみる。

〔A〕離別

三十五例。五種類のなかでは最多であり、唐詩においては完全に定着していた用法である。このばあい、宴席で友人と同居している作品中の「勞歌」であれば、ほぼ例外なく「離別」を意味している。それと同時に、遠方にいる友人にあてた作品中でも多用されているので、よりせまい意味での「送別」と定義することは、不十分であるといえよう。

前述のとおり、ここでは24番を掲載する。

- | | | |
|---|---------|------------|
| 0 | 送王五昆季省觀 | 孟浩然 |
| 1 | 公子戀庭闈 | 公子は庭闈を戀い |
| 2 | 勞歌涉海涯 | 勞歌して海涯を渉る |
| 3 | 水乘舟戲去 | 水は舟戲の去るを乗せ |
| 4 | 親望老來歸 | 親は老來の歸るを望む |
| 5 | 斜日催烏鳥 | 斜日は烏鳥を催し |

中國古典詩における「勞歌」について（上）（井口）

- | | | |
|---|-------|-------------|
| 6 | 清江照綵衣 | 清江は綵衣を照らす |
| 7 | 平生急難意 | 平生急難の意 |
| 8 | 遙仰鵲鵲飛 | 遙かに鵲鵲の飛ぶを仰ぐ |
- （大意：わたしは、親族を訪問しに出發したあなたをみおくっている。）

〔B〕勞働

八例。用例数は、「離別」の四分の一にみたない。ただし、「勞」の基本的な字義からすれば、「勞働」の方が、より直接的な用法であろう。

ここでは、23番を掲載してみる。

- | | | |
|---|-------|----------------|
| 0 | 田園作 | 孟浩然 |
| 1 | 弊廬隔塵喧 | 弊廬塵喧を隔て |
| 2 | 惟先養恬素 | 惟だ先ず恬素を養う |
| 3 | 卜鄰近三徑 | 卜鄰近三徑に近づき |
| 4 | 植果盈千樹 | 植果は千樹に盈つ |
| 5 | 粵余任推遷 | 粵に余推遷に任じ |
| 6 | 三十猶未遇 | 三十にして猶お未だ遇せられず |
| 7 | 書劍時將晚 | 書劍時は將に晚れんとし |

中國詩文論叢 第十九集

- 8 丘園日已暮 丘園きゅうえん 日は已すでに暮る
- 9 晨興自多懷 晨あしたに興おきては 自ら懷おもうこと多く
- 10 晝坐常寡悟 晝ひるに坐ざしては 常に悟つねること寡すくなし
- 11 冲天羨鴻鵠 天を冲こうきては 鴻鵠こうこくを羨うらやみ
- 12 爭食羞雞鶩 食を爭せういては 雞鶩けいぶに羞はづず
- 13 望斷金馬門 望斷ぼうだん 金馬きんばの門
- 14 勞歌采樵路 勞歌らうか 采樵さいしやうの路
- 15 鄉曲無知己 鄉曲きやうきよくには知己ちきを無なくし
- 16 朝端乏親故 朝端ちやうたんには親故しんこを乏とほしくす
- 17 誰能爲揚雄 誰たれか 能よく 揚雄やうゆうの爲ために
- 18 一薦甘泉賦 一ひとたび甘泉賦かんぜんふを薦すすむる
- (大意・隱棲しているのは、仕官がうまくいかなかったからである。三十歳になるというのに、不遇でいる。だれかに推薦してほしいものだ。)

二首の引用作品の存在から、作者の孟浩然においては、「離別」と「勞働」という「勞歌」の代表的な二義が混亂なく竝存していたことが、あきらかである。ちなみに、文獻③《孟浩然詩集校注》でも、23番の〈田園作〉については「(十四) 勞働之歌」[第百四十三頁]、24番の〈送王五昆季省觀〉

については「(二三) 送別之歌」[第四百二十五頁]と、わけて注釋している。

「勞働」よりも「離別」の用法が壓倒的におおい理由は、唐詩の題材として、「勞働」よりも「離別」の方がおかった、という單純な事實にもとづいているとかがえられる。

〔C〕歌唱

四例。この用法は、前二項とはことなつて、辭書類では定義されていない。かりに、「歌唱」が、友人とわかれ(てい)ることや、重勞働に起因しているならば、「離別」や「勞働」を意味している蓋然性がたかいといえる。しかしながら、「離別」や「勞働」では解釋しきれない作品も、たしかに存在する。

ここでは、作例として、49番の作品を掲載してみる。

- | | | |
|---|---------|---|
| 0 | 晚秋野望 劉滄 | 秋 <small>あき</small> は郊原 <small>こうげん</small> に盡 <small>つ</small> き 情 <small>じやう</small> は自ら <small>おのづか</small> 哀 <small>かな</small> しむ |
| 1 | 秋盡郊原情自哀 | 秋 <small>あき</small> は郊原 <small>こうげん</small> に盡 <small>つ</small> き 情 <small>じやう</small> は自ら <small>おのづか</small> 哀 <small>かな</small> しむ |
| 2 | 菊花寂寞晚仍開 | 菊花 <small>きくか</small> は寂寞 <small>せきばく</small> として 晩 <small>ばん</small> に仍 <small>な</small> お開 <small>ひら</small> く |
| 3 | 高風疏葉帶霜落 | 高風 <small>こうふう</small> の疏葉 <small>そふ</small> は 霜 <small>しも</small> を帶 <small>お</small> びて落 <small>お</small> ち |
| 4 | 一雁寒聲背水來 | 一雁 <small>いちがん</small> の寒聲 <small>かんせい</small> は 水 <small>みづ</small> に背 <small>そむ</small> いて來 <small>き</small> たる |

- 5 荒壘幾年經戰後 荒壘 幾年 戰後を經
6 故山終日望書回 故山 終日 書回を望む
7 歸途休問從前事 歸途 從前の事を問うを休めよ
8 獨唱勞歌醉數杯 獨唱勞歌を唱い 數杯に酔う
- (大意・晩秋の郊外は、ものさびしい。ひとりであうたいながら、さけをのんでいる。)

この作品における「勞歌」は、「離別」にも「勞働」にも該当しておらず、かといって、「勞」と「歌」とが偶然にならんでいるわけでもない。したがって、本稿では第三の項目をもうけておくことにする。

以上の三種類とくらべると、以下の二種類の「勞歌」は、きわめて類別しやすいわりに、重要度もひくい。

〔D〕偶然

五例。「勞」と「歌」とが偶然に連續したばあいでは、「勞歌」には、特定の意味がない。ただし、これらの用例は、「勞歌」の由來を説明するうえで、きわめて重要となる可能性もある。というのは、二字からなる「勞歌」が、本來は三

字以上の語句であった可能性もあるからである。特に、「勞」を疊用している44番の用例「勞勞歌路難」「勞勞として路難を歌う」などは、あらためて検討する必要がある。

〔E〕例外

九例。これらの重複分や異文については、【付表】の備考でも簡単に指摘しておいた。

〔注記〕本項目には、〈東飛伯勞歌〉の類作が四例ふくまれている。一般に梁武帝の作品とみなされている同題の古辭は、「東飛伯勞西飛燕」「東に飛ぶ伯勞 西に飛ぶ燕」という一句ではじまっている。基本は七言十句形式で、内容的には艷詩に分類される。詩題の構文は「東に飛ぶ伯勞の歌」であり、「東飛伯の勞歌」ではない。《樂府詩集・卷六十八・雜曲歌辭八》には、類作をふくめて全十首が收録されている。そのうち、文獻①《先秦漢魏晉南北朝詩》の方には八首が收録されていて、古辭に一首、梁簡文帝に二首、劉孝威・陳後主・陸瑜・江總・辛德源に各一首がある。

五 使用位置

ある作品における「勞歌」の使用位置には、きわだった特

徴がある。【付表】をみると、文獻②《全唐詩》收録作品のうち、「〔A〕離別」「〔B〕勞働」「〔C〕歌唱」の三種類・計47首における「勞歌」では、九例が第一聯にあるのに對して、二十五例が最終聯にあり、後者は過半数に達している。この差異は、單なる偶然の結果ではなさそうである。

その要因は、表面的にみると、先例の踏襲を指摘できる。たとえば、第三章に掲載しておいた初期の二首では、いずれも「勞歌」が最終聯で使用されていた。ただし、これら二首の作品だけでは、量・質ともに、規範とするには不足である。

作例をみると、最多數をしめている「離別」的「勞歌」は、作品の前部における交友關係の描寫・回想をしめくくる役わりをはたしている。ことばをかえれば、「わかれの挨拶」として機能している、ともいえる。「勞歌」が終結部分で多用されている要因は、この點にあるのではないか。

六 おわりに

【付表】をみると、「勞歌」は、王維や韓愈や白居易などの著名な詩人には使用されておらず、李白・杜甫の用例も微々

たるものであったから、印象のよいことばであるといえよう。その要因としては、以下の二點がかんがえられる。

(一) 用語の多義性：「離別」「勞働」「歌唱」という三義をふくんでいたため、焦點が散慢である點。

(二) 曖昧な由來：「勞歌」が《詩經》や《楚辭》では使用されていない點であり、前項とも關係する。

本稿の内容をふまえたうえで、あらたな一篇では、「勞歌」の本質を検討して、命名についての假説を提起してみたい。

【文獻】

① 《先秦漢魏晉南北朝詩》 逯欽立「輯校」

一九八三 中華書局

② 《全唐詩》

一九六〇 中華書局

③ 《孟浩然詩集校注》 李景白「校注」

一九八八 巴蜀書社

【付表】《全唐詩》における「勞歌」の全使用例

頁	卷	作 者	作 品 名	句 數	當 該 句	A	B	C	D	E
1	5	1	太宗皇帝	過舊宅二首	22 22	無○○大風			○	
2	11	1	太宗皇帝	詠風	8 7	○○大風曲			○	
3	336	25	張柬之	雜曲歌辭 東飛伯○○	10 0	———				○
4	515	41	盧照鄰	和王夷秋夜有所思	12 11	○○欲有和	○			
5	540	44	劉禕之	酬鄭沁州	20 20	○○思足曲	○			
6	606	49	張九齡	南還湘水言懷	12 2	○○念不成	○			
7	652	53	宋之問	發藤州	20 19	○○意無限	○			
8	679	56	王勃	泥谿	12 12	○○誰復知	○			
9	689	57	李嶠	擬古東飛伯勞西飛燕	10 0	———				○
10	695	58	李嶠	和杜學士江南初霽羈懷	8 8	○○動四愁	○			
11	738	62	杜審言	贈崔融二十韻	40 6	○○奇樹黃	○			
12	754	65	蘇味道	始背洛城秋郊囑目奉懷臺中諸侍御	16 16	○○謝所欽	○			
13	830	77	駱賓王	在江南贈宋五之問	72 71	不惜○○盡	○			
14	854	79	駱賓王	冬日野望	10 9	○○徒自奏	○			
15	855	79	駱賓王	送吳七遊蜀	12 9	○○徒欲奏	○			
16	1067	99	張柬之	雜曲歌辭 東飛伯○○	10 0	———				○
17	1078	101	宋務光	海上作	32 29	○○玄月暮	○			
18	1179	117	張旭	清谿泛舟	4 2	薄暮起○○	○			
19	1370	135	綦毋潛	送鄭務拜伯父	8 4	○○過郢人	○			
20	1417	139	儲光羲	大學貽張筠	12 12	○○還自傷	○			
21	1600	155	崔曙	途中曉（一作晚）發	8 2	○○赴遠期	○			
22	1618	159	孟浩然	晚春臥病寄張八	24 12	衾枕○○詠				○
23	1627	159	孟浩然	田園（一作家）作	18 14	○○采樵路	○			
24	1640	160	孟浩然	送王五昆季省覲	8 2	○○涉海涯	○			
25	1679	161	李白	古風五十九首・其二十一	8 3	徒○○此曲				○
26	1751	170	李白	贈易秀才	12 12	○○寄此辭	○			
27	2131	204	楊賁	時興	8 8	無○○是非				○
28	2187	210	皇甫曾	送鄭秀才貢舉	8 8	相送一○○	○			
29	2516	230	杜甫	寄劉峽州伯華使君四十韻	80 46	○○謁寢興	○			
30	2609	236	錢起	冬夜題旅館	10 9	○○待明發	○			
31	2767	246	獨孤及	壬辰歲過舊居	16 4	猶作○○人	○			
32	2809	249	皇甫冉	上禮部楊侍郎	24 23	○○終此曲	○			
33	2994	269	耿漳	酬張少尹秋日鳳翔西郊見寄	20 10	○○騎吏聞	○			
34	2994	269	耿漳	春日書情寄元校書伯和相國元子	16 14	○○調自悲	○			
35	3206	282	李益	入華山訪隱者經仙人石壇	34 34	○○叩山木	○			
36	3326	293	司空曙	擬百○○	10 0	———				○
37	3568	317	武元衡	途次（一下有昭應二字）	12 2	○○行路難	○			
38	3618	321	權德輿	戲和三韻	6 3	君今復○○	○			

頁	卷	作者	作品名	句數	當該句	A	B	C	D	E
39	3640	324	權德輿	送鄭秀才貢舉	8 8	相送一○○				○
40	4024	357	劉禹錫	請告東歸發灞橋卻寄諸僚友	8 8	感歎益○○	○			
41	5471	481	李紳	憶登樓（一作西）霞寺峰 （效梁簡文）	28 25	○○起舊思		○		
42	5481	481	李紳	登（一作祭）禹廟迴降雪 五言二十韻	40 39	○○會稽守	○			
43	5988	523	杜牧	有懷重送斛斯判官	4 2	我有○○一爲聽	○			
44	6049	529	許渾	送惟素上人歸新安	8 8	勞○○路難			○	
45	6053	529	許渾	秋日赴闕題潼關驛樓	8 7	帝鄉明日到				○
46	6069	531	許渾	寄袁校書（一作袁都校書）	8 7	○○極西望	○			
47	6136	538	許渾	謝亭送別（一作客）	4 1	○○一曲解行舟	○			
48	6796	586	劉滄	訪友人郊居	8 7	醉唱○○翻自歎	○			
49	6802	586	劉滄	晚秋野望	8 8	獨唱○○醉數杯		○		
50	7507	654	羅隱	春日宿崇賢里	8 7	○○莫問秋風計	○			
51	7558	658	羅隱	湘中贈范郎	8 7	○○一曲霜風暮	○			
52	7583	661	羅隱	早秋宿葉墮所居	8 8	○○共一懽	○			
53	7595	663	羅隱	送顧雲下第	8 2	怨歎○○兩未伸	○			
54	7619	665	羅隱	投宣武鄭尚書二十韻	40 38	○○且責躬	○			
55	8380	733	孔德紹	夜宿荒村	12 11	○○欲敘意		○		
56	8466	745	陳陶	塗山懷古	48 47	○○下山去		○		
57	8768	773	李暇	擬古東飛伯○○	10 0	———				○
58	9115	808	慧淨	雜言	68 47	○○勿復陳	○			
59	9119	808	義淨	與無行禪師同遊鷺嶺瞻奉 既訖迴眺鄉關無任殷憂聊 述所懷爲雜言詩	68 47	○○勿復陳				○
60	9625	850	慕幽	酬和友人見寄	8 1	○○好自看	○			
61	9991	884	許渾	夜行次東關（一作行次 潼關驛）逢魏扶東歸	8 7	○○此分首	○			

〈備考〉3：同16。9：一本題作東飛伯○○。13：③一作悲。22：④一作感。16：同3。17：（宋先）。39：同28。41：一本下有懷望二字。45：（一作行次潼關，逢魏扶東歸）、一作○○此分手。51：④一作奏。58：同59、一作義淨詩。59：同58、一作慧淨詩。60：一作冬日淮上別文上人。61：⑤一作手。